

INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第18回総会報告	1	
■第33回運営委員会報告	2	
■事務局移転のお知らせ	2	
■事務局移転にあたって	会長 加藤淑裕	3
■新事務局あいさつ	幹事長 安増郁夫	3
■第18回大会を終えて	大会委員長 大西英爾	3
■第18回大会決算報告	大会準備委員会	5
■大会に参加して	松田良一, 米田満樹, 片桐千明	6
■成茂寄付金によるISDB参加旅費援助者選考結果		9
■学会によるISDB招待講演者への旅費一部援助の件		10
■第3回(後期)成茂海外出張旅費援助者の募集		10
■昭和61年度ナポリ臨海実験所派遣研究者の募集		10
■昭和61年度山田科学振興財団の研究援助候補推薦について		12
■昭和61年度山田科学振興財団の来日, 派遣・集会の援助について		13
■国際生物学賞について		13
■日本学術会議第97回総会報告		14
■会員異動		17

NO.51

JULY 1985

日本発生生物学会

〒160 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育学部生物学教室

日本発生生物学会の諸組織は以下のとおりです

会 長：〒 194 町田市南大谷11
三菱化成生命科学研究所 発生生物学研究室
加藤淑裕（電話 0427-26-1211 内線244）

DGD編集主幹：〒 812 福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学理学部生物学教室
山名清隆（電話 092-641-1101 内線4408または4410）

DGD編集幹事：〒 730 広島市中区東千田町1-1-89
広島大学総合科学部
天野 実（電話 082-241-1221 内線357）

事 務 局：〒 160 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学教育学部生物学教室
（電話 03-203-4141 内線 3911）

（幹 事 長） ^{ヤスマス} 安増 ^{イクオ} 郁夫
（会計幹事） ^{フジワラ} 藤原 ^{アキコ} 昭子
（庶務幹事） ^{ナミキ} 並木 ^{ヒデオ} 秀男

学会センター：〒113 文京区弥生2-4-16 
学会センタービル内日本学会事務センター
日本発生生物学会係（電話 03-817-5801）

入退会、会費納入、および出版物（DGD、サーキュラー等）の郵送については、上記学会事務センターに書面で御問合せ下さい。

発行部数の送先

1. 第18回総会報告

第18回総会は、昭和60年5月10日午後1時より名古屋大学豊田講堂において開催された。

議長に中江憲夫氏（明治乳業ヘルスサイエンス研究所）を選出した後、以下の次第で議事が進行し全て承認された。

1) 大西英爾第18回大会委員長挨拶

2) 加藤淑裕会長挨拶

3) 昭和59年度活動報告

(i) 事務局より：柳沢富雄幹事長

- ・第9期会長・運営委員選出選挙（S59.10月）
- ・第32.33運営委員会開催（S60.1月と5月）
- ・成茂寄付金によるISDB参加旅費援助者7名を決定（本号9ページ参照）
- ・ISDB招待講演者など2名の会員に学会より旅費の一部援助決定。
- ・山田財団による研究援助候補者として学会より2名推薦。
- ・事務局は今大会後早稲田大学へ移る。

次期幹事長安増郁夫氏挨拶

- ・会員数 昭和60年5月現在707名

(ii) DGD編集委員会より、山名清隆編集主幹

- ・59年度は26巻を6号まで出した。

掲載論文総数 60編

- ・27(3)は金谷記念号とする。
- ・27(4)以下の号に金谷 dedicated 論文が載る。
- ・27(4)は本大会発表講演要旨がのる。
- ・定期的に出版するよう努力したい。
- ・ふるって原稿をおよせ下さい。

4) 昭和59年度決算報告 上村会計幹事

サーキュラー№50参照

5) 会計監査報告（星元紀、森岡瑞枝会計監査委員）

適正であった旨報告された。

6) 昭和60年度の学会活動について 加藤会長

- ・金谷記念号の発刊に伴う印刷経費の増加（約20万）のうち70万円を会員有必の寄付に頼みたい。
- ・DGDの海外購読者を増やすため Academic press による海外頒布の distribution 検討中である。慎重に検討した上、Go signn を出したい。
- ・次期大会は筑波大学で引受けてくれた。

7) 昭和60年度予算案 上村会計幹事

サーキュラーNo.50参照

8) 第19回大会準備委員長挨拶 渡辺 浩(筑波大)

期日は、5月16日(木)、17日(金)、18日(土)の予定である。

この他、国際発生物学会の岡田節人会長の挨拶があった。質疑は出なかった。

2. 第33回運営委員会報告

第33回運営委員会は、昭和60年5月9日午前10時より名古屋大学豊田講堂会議室で行われた。

出席者は以下の通り(敬称略)

加藤淑裕(会長)、天野 実(編集幹事)、石崎宏矩、大西英爾(第18回大会委員長)、岡田節人、片桐千明、黒田行昭、塩川光一郎、杉山 勉、竹市雅俊、団まりな、東中川徹、毛利秀雄、米田満樹、山名清隆(編集主幹)以上運営委員

星 元紀(会計監査委員)、梶山正雄(学術会議員)、安増郁夫(次期幹事長)

柳沢富雄(幹事長)、上村伊佐緒(会計幹事)、矢崎育子(庶務幹事)

報告審議事項のうち総会と重複するものは省略する。梶山学術会議委員による学術会議報告がなされ、International Symposium on Sperm に対する学術後援が承認された。Academic press によるDGD海外頒布の件は会長の招集した下記のようなDGD海外頒布に関する検討委員会が引きつづき検討を行うことが認められた。

委員会の構成：会長の指名による委員の構成は次の通り(順不同、敬称略)。

加藤淑裕会長、山名清隆(編集主幹)、江口吾朗、平本幸男、天野 実(編集幹事)、

星 元紀、および事務局(幹事長、会計幹事、庶務幹事)。

第1回の検討委員会は、60年5月8日名古屋名鉄グランドホテル・ロビーで行われ、Academic Press Japan によるDGDの海外頒布委託の件はAPの強力な海外販売網にのせることによって期待されるDGDの海外進出を目的とし、昭和59年度に学会がDGDの海外頒布によって得ている収入を委託後下まわることがないという条件で、実現の方向に努力することになった。

事務局移転のお知らせ

昭和60年6月より事務局が下記に移転しました。

〒160 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学教育学部生物学教室

電話 (03-203-4141 内線 3911)

幹事長 ^{ヤス}安 ^{マス}増 ^{イク}郁 ^オ夫

庶務幹事 ^{ナミ}並 ^キ木 ^{ヒデ}秀 ^オ男

会計幹事 ^{フジ}藤 ^{ワラ}原 ^{アサ}昭 ^コ子

事務局移転にあたって

2年有余にわたって、当学会の事務局を引き受けて頂いた都立大学・理学部・生物学教室の柳沢富雄幹事長、矢崎育子庶務幹事、上村伊佐緒会計幹事の諸兄姉に心よりお礼申し上げたいと存じます。健全かつ厳正な会計のもとで、当学会の直接の運営を円滑に行って頂いたことを会員各位と共に心より感謝の意を表します。

引きつづき事務局を早稲田大学・教育学部・生物学教室の安増郁夫先生にお願いいたしましたところ心よく御引き受け頂き誠に感謝に耐えません。雑作なお役目を御引き受け頂きました安増郁夫幹事長、並木秀男庶務幹事、藤原昭子会計幹事の諸兄姉に深く謝意を表する次第です。

昭和60年6月11日

会 長 加 藤 淑 裕

新事務局あいさつ

この度、思い掛けなく発生生物学会の事務局をお引き受けすることになりました。われわれ一同事務を滞なくできるかどうかについては全く自信がありませんが、ご迷惑をお掛けしないよう努力するつもりです。なにか事務上の問題がございましたらお知らせ下されば幸いです。今後約2年間、よろしくお願い致します。

日本発 生 生 物 学 会 事 務 局

早稲田大学教育学部生物学教室

幹 事 長 安 増 郁 夫

庶 務 並 木 秀 男

会 計 藤 原 昭 子

6. 第18回大会を終えて

大会委員長 大 西 英 爾

立場というのは不思議なものである。大会をお引受けしてから、それまでは考えてもみなかったことをいろいろと考えさせられた。まず、大会とは何ぞやという事である。皆、何を求めて大会に参加するのだろうか。1.自分たちの成果を報告し、いろいろアドバイスを得る。2.全国の同学の士に会い、旧交を温め、刺激を受ける。3.専門外の周辺の知識を増やす、などだろうか。1.に対しては、なるべく研究交流の情報量を大きくする工夫が必要であり、また、居心地の良い休憩室、そして懇親会だろうか。3.に対してはワークショップ、シンポジウム、特別講演となる。もうひとつ、発生生物学のようなサテライト学会の存在意義は何だろうか。動物学会などのような親学会の縮小コピーになっては何の意味もない筈である。加藤会長の言葉のように、発生生物学会の会員数が適正サイズ!ならば、そのサイズをどのように有効に生かすのか、という問題もある。

一般発表をすべてポスターとしたのは、実に簡単な算術の問題から出発している。昨年の熊本、

一昨年の松山とも、一般発表は約120題、これを講演型式で質問時間を含め1題20分とすると、2会場3日間を殆んど埋めて余り余裕がでない。もしも熊本や松山よりも交通に便利な名古屋で大会を行なえば、講演題数は恐らく2割増くらいを覚悟せねばならないだろう。そうするとシンポジウム、ワークショップなどを削るか、一題あたりの講演時間を減らすか、あるいは会場の数を増やすか以外にはない。これは、いずれもやりたくないと思った。大袈裟に言えば、発生生物学学会の大会のあり方の根幹にかかわると思ったのである。そして、そのほぼ唯一の解決策は、ポスター型式の大幅導入であった。ポスターは準備にかなりの手間を食い、持ち運びにも不便ですが、質問時間の限られた講演型式とは異なり、自分の知りたい点をトコトン尋ねることができるという大きなメリットを持っている。ポスターを導入することにより、初日は午後からという昨年の運営委での御提言を実現し、またワークショップのほかに特別講演の時間も作り出すことができた。ポスター型式と講演型式にはそれぞれ、一長一短があり、その得失は一概にはいえないと思うが、当学会の発展型式としては、あわせて御検討願いたいと思っている。尚蛇足ながら、ポスターの上手なディスプレイの工夫や、質問者が特定の発表者を長時間独占しないなどの、ポスターセッションをより効果的にする工夫も必要と思うが、これは回を重ねることによって自然と身につくことだろう。

ワークショップは公募とし、主催者側は何もしなかった。にも拘らず三件という手頃な数の応募があり、しかも細胞外マトリックス、軸形成、モデル作りという、それぞれ発生生物学の根本にあるテーマの揃ったことは、奇跡に近い偶然であった。ワークショップの成功は、企画・運営すべてに当られた世話人の手腕によるものである。土曜の午後というのに、三会場とも最後まで立錫の余地もなく、熱心な討論が続いていた。B、C会場では電気配線の具合が悪く、再三に渡って停電して御迷惑をおかけした。参加者の皆様にお詫びしたい。

特別講演は京大の本庶教授と、基生研の岡田所長にお願いしたが、それぞれ含蓄のある名講演であったと思う。スピーカーシステムが老朽なのと、ホールの音響効果が悪いことから、音声の聞きづらかったことは、全く残念なことであった。

発生生物学学会と似たようなサテライト学会に日本動物生理学会がある。この学会のサーキュラー「動物生理」第1巻第4号に山元大輔氏が第6回大会の印象記を寄せているが、この種の文としては異例の率直さで大会の（とくにオーラルセッションの）低調さを嘆いておられる。同じ動物生理の第2巻第1号には、この文を受けて鈴木龍夫氏が「動物生理学会の老化問題」と題して大会のあり方を論じておられる。発生生物学学会の大会は、異常なまでに熱心な会員のエネルギーに支えられていると思われるが、両学会の違いは学問の性格によるものか、会員の年齢層の違いによるものか、両学会に出席された方があれば御意見を承りたいものと思う。名古屋でのポスター採用を契機として、大会のあり方についての論議が沸騰するならば、私たちの望外の喜びである。

大会運営は予備実験も追試もない一発勝負で、馴れぬ仕事にとまどう事も多かった。かえりみて始めて言えることも知れないが、大会はなるべく人手も金もかけない、さりげない企画と運

営が理想ではあるまいか。名古屋でもボードの借用やその他に利用したが、最近進出してきた「学会請負い業者」も、積極的に利用するのも良いだろう。それだけでなくとも雑務の多い日本の大学・研究所に研究と教育以外の用事を持ち込むことは、できるだけ避けるべきと思うからである。

大会の成否は、参加される会員の活力に依存している。私たちは、名古屋の会場で熱気あふれる討論を展開した参加者の群像に脱帽した。明年また風薫る頃、筑波の研究学園都市で生気の満ちた大会が持たれることを確信するものである。

7. 第18回日本発生生物学会大会決算書

1. 収入の部

参加費	1,385,000 円
(一般参加費 @5,000×221人)	(1,105,000)
(学生参加費 @4,000×70人)	(280,000)
学会本部からの補助金	250,000
要旨集印刷費送料補助	504,000
広告掲載料・展示料	653,600
利子	4,120
合計	2,796,720

2. 支出の部

会場使用料	191,142円
会場設営費	421,600
講師旅費謝金	129,000
アルバイト人件費	574,880
懇親会茶菓代	189,433
通信・郵送費	60,055
事務用品購入費	22,950
準備委員会・開催費	53,126
印刷費	36,260
講演要旨集印刷	480,000
同 送料	24,000
合計	2,182,446

3. 残金 614,274

以上、第18回大会準備委員会

なお上記残金は全額、学会に寄付いただきました。

昭和60年6月1日 学会事務局

8の1. Epigenetic な学会でした

松 田 良 一（東京都立大・理・生物）

動物の発生過程における微環境の果す役割は大きい。細胞間相互作用によって細胞同志がその発生運命や分化過程に影響を及ぼしあうためと考えられる。第18回の発生生物学会大会も学会員という細胞が集まり、学問的に影響しあうのに好適な微環境をつくったといえる。その主たる原因は言うまでもなく発表形式をこれまでの一方的な口演からポスター中心にしたためであろう。これによって会場全体が議論の熱気にあふれ、とかく「すまし顔」だった学会発表が実に人間臭い event となった。お互いに研究内容が近ければ近い程、ポスターのデータを目の前にして実験条件や技術などについての細かい議論ができたし、畑の異なる研究に対しては、口演形式では躊躇するようなごく初歩的質問もすることができた。また、そのような質問も受けた。概して、そのような質問の中に研究に対する励ましや、時として痛烈な批判がふくまれていることがある。また各人が自分の仕事に対する世人の関心度を膚で知ることができる（もっとも流行と学問は本来無関係であるが、公費で研究をしている限り無視することはできないだろう）。さらに議論は発表内容に関することから研究費の問題や、大学と研究所との研究態度の相違といった話題にまでエスカレート(?)することもあった。これら全てがポスターを前にして行なわれたのだから参加者同志の相互作用も大したものであった。その他細かいことを書けば、

○ポスターは一日中掲示した方が良いと思う（発表者は2.5時間位いれば良いとしてだが）。発表者にとっては発表時間に他の会場のポスターを見てまわることはできないわけだから。

○発表者がいなくとも必須な内容は見る人間にわかる様に自己説明レイアウトをとるべきであろう。

○ポスターの使用言語は日本語を原則とし、英文アブストラクトを添えるように統一した方が良いでしょう。

○ワークショップでは筆者はA、B両会場を「はしご」したが、企画は成功でどちらも興味深かった。ただB会場で発表の最中に10回以上も電源トラブルがあったのは残念であった。

これも口演形式の技術的問題点を浮きぼりにしたといえる。

○ポスターをもっと話題別にしてミニシンポジウムないし簡単なワークショップと組みあわせると面白かったかもしれない。

○それにしても足が疲れたので会場の広さやいすの数についてももう少し余裕が欲しかった。

○大会主催者側にとってもポスターの方が口演形式より会場設営が容易だろうと思えた。これならと大会をひきうける大学がふえるのではないだろうか。

翻って今、何故、学会大会があるのか考えてみよう。

単に研究成果の公表のみであれば出版物でこと足りるはずである。この情報メディアの発達著しいなかで、あえて大会を催して、全国から高い旅費を払いながらも人々が集まってくるのは単に発表が目的なのではなく、皆が人と人との（学問的な）skin ship を期待しているからではな

いだろうか。従がって、参加者同志のコミュニケーションを主体としたポスター中心の大会はこれからの学会にふさわしいものであろう。

今回の大会で学会の存在理由、大会での情報伝達形式について一考をうながし、首尾よく大成功に終らせた大西英爾大会委員長はじめ名大のスタッフ・学生の諸氏、協力下さった中部地区の多数の大学・研究機関の方々本当にご苦労様でした。筑波大の皆様、来年を期待しています。

8の2.

米田満樹(京大・理・動)

口頭発表をやめてポスターだけにする方式は、この学会の大会としては初の試みだ。名古屋の準備委員会からの案内を見たとき、私はその試みに俄かに賛成という気にはなれなかった。口頭発表でなら「公開の場での討論」の機会が約束され、いうまでもなくそれが一般聴衆にとっての共有の知識となり、結果としてそれぞれの仕事があるいはカッサイを浴び、あるいはケチがついて公に認知されるのだけれど、それらはポスターセッションによってはかなえられない、とそのとき考えたからだ。

大会当日のポスターセッションの、まるでお祭りのような賑わいには驚いた。参会者の皆さんと同様私も数人のポスターの演者達と、まことに詳しく、しつこく、かつ親しく話をかわす機会を得た。初回にも関わらず、ポスター方式の独特のメリットが十分に生かされたというべきであろう。演題を出さなかった参会者も、例年のように黙って発表を聞くのではなく、演者達との会話を通じて、まさしく学会に参加したという気分をもったにちがいない。

ポスターのできばえは「もうひと工夫したらよいのに」と思えるものが多く、ポスターだけで話が自明というわけにいかなくて(ポスターは読むものじゃない、眺めたらわかるべきものだ、と私は思っている)、しばしば「始めから説明して下さいよ」と頼むほどだったのに、なおこんなに熱気のあふれた盛り上がりになったのは、発生物学会ならではのことであろう。

だがお祭りがすみ、研究室にもどってから私はふっと気づいた。ことしの大会では、何としばしば身近の仕事や、わけ知りの相手とばかりつき合っていたことか。未知の人達、未知の分野のことを何と少ししか学ばずに帰ったのか。何しろ1セッション当り32個のポスターを読みとおせるわけがない、まるで32の会場を2時間半でまわるようなものじゃないか、これはきき手の側の言い分であろう。だがポスターの演者にはオブションはなく、他の31のポスターをみるために席を外すわけにもいかず、しかも場合によっては客がひとりもつかないことだってある。知名度があり、または確立した分野に関わる人々にとってポスターはまたとない濃密な研究交流の場を提供するであろうが、初めて学会に登板する人、未開の分野を手がける人にとって、ポスター方式が情報伝達のいい手段にはなりにくいと思う。学会の前に予想したとおり、これは個人的な交流を深めるだけで、研究が公表・認知されることにはならないと、私は実感した。

研究が公開され、参加した会員によって評価を含めた認知をされることが、現代の研究者にとっては死活のことだ。それは科学研究費の配分をうけること、ポストをうることと結びついてい

る。公の認知の場が学会を措いて他にある筈がない。

個々の研究者の年ごとの状況によって、また話の内容によって、ポスターにしたい年もあり、また口頭発表でないと困る年もあるだろう。どちらも自分で選べる方式が私には望ましい。そのために必要なら会期が延長するのもよいであろう。以上次回大会への私の希望である。

8の3. ポスターセッション体験記

片 桐 千 明 (北大・理・動物)

例年5月中～下旬に開かれる発生物学会は、樹々が新芽をふきはじめているとは言っても朝夕ストーヴを離せない北海道から、一気にむせかえる初夏のなかに放り出される、という独得の季節感を私には伴っている。今年も、ツツジが咲き乱れる名大・豊田講堂の前の芝生で九州から来られた先生と久しぶりで語らうときをもったのも、この学会ならではの体験であった。

さて、今大会の感想を一言でのべれば、“疲れた”ということになるだろう。その背景には、明らかにポスター展示という発表形式に対する当方の不慣れがある。これまでもいくつかの経験があるとはいえ、全ての発表がポスターで行われた学会ははじめてであり、この大会での体験は、単に発表形式の問題に限らない、meeting というものの意味を考えさせるよい機会を与えてくれたといえる。主催者がこの発表形式を選択された動機のひとつは、講演数が年々増加するに伴い、2会場でしかも講演時間を短縮せざるを得ない悩みを打開するところにあったと推察される。その限りでは、昨年とほぼ同数の一般講演を実質1日半で消化できたところにもみられるように、成功している。一方、参加する側からは、細かい点では例えば与えられるパネルが何色であるかというようなことも含めて、若干の情報不足から展示の効果についての不安を予めもった演者もいたに違いない。とはいえ、1日目の午後いざ展示が始まると、たちまちそこそこ人垣ができて上って活発な質疑が自然に交され、熱気があふれたのはさすがであった。

こうして実際に討議に加わってみると、参加者に求められる要件のいくつかがわかってきた。まずポスター展示の場合は討論に参加せぬ視聴者という立場は殆んど意味がなく、また限られた時間内によく理解しようとすれば、その研究に関しては introduction を不要とする程度の子習が望ましいこと。つぎに30の展示が3会場で同時進行している状況にあっては、特定の展示に長くかかり過ぎると他への参加が不可能になり、多くの展示にあたろうとすればかなり意識的な自己調整が必要であること。私自身についていえば、この調整がうまくできなかったためいささかのフラストレーションが残ってしまった。ともあれ、これらはいずれも口頭発表を聴くのにくらべてわれわれに主体的参加を要求するものであって、それが上述の“疲れ”を感じさせたのであろう。もうひとつの問題点は、同じ時間帯に展示を行っている発表者と直接討論するチャンスが無いことであり、これは互いに近い分野の人が重なる場合が多いだけに具合が悪い。このあたりが口頭発表と著しく異なるところで、展示をアレンジする際の技術上の課題といえるだろう。

というような次第で、ひとつには参加のしかたのまずさも手伝って、直接討議に参加した以外の発表に関する印象が散漫なのは残念である。ひるがえって口頭発表では、情報を居ながらにし

て得られる安直さとか個々の細かな実験データよりは、その研究の意図とか論理の展開の流れを通して多少異なる分野の仕事からも触発されるチャンスが多いはずで、この利点こそを有効に用いるべきであろう。またひとつの研究に対して公開で行われる質疑や批判を眼のあたりにすることによって、いかに多くを学んでいるかについて改めて考えたことであった。もっとも、展示形式で行われる密度の濃い論議にも楽しみはあり、私自身も自らのポスターを前に質疑を重ねるうちに潜在的にあったアイディアが顕在化するのを体験したし、展示に対する直接的な反応を興奮の面もちで語る院生が身近にいたこともつけ加えておきたい。当然のことながら、発表が口頭かポスターかは研究の内容・特性に見合わせて決められることであり、今大会の体験はそのための貴重な判断材料をもたらしてくれた。思いきった企画をされた準備委員会の方々に感謝と敬意を表したい。

ポスターセッションについての感想を書きつらねるだけで、与えられた紙面が尽きてしまったが、免疫グロブリンとクリスタリン蛋白遺伝子の発現調節という現在の細胞分化のモデルの双壁をなす課題にとりくむ当事者お二人による特別講演は、それぞれ個性があふれまた時宜を得た企画であったし、最終日午後の3つのワークショップも意欲的なもので、いずれに出席すべきか迷う人が多かったに違いない。

9. 成茂寄付金によるISDB参加旅費援助者の選考結果

成茂科学器械研究所寄付金による海外出張旅費援助（第2回、第3回前期分）を下記の通りに決めた。

- A. 選考委員：選考委員として新たに運営委員の塩川充一郎氏（九大）が加わり、加藤会長、平本幸男氏、柳沢幹事長の4名で選考を行った。
- B. 昭和59年度援助者の辞退：第1回の援助者に採択された2名のうち、山崎喜代子氏（名大研究生）から、他所からの出張援助金が得られたという理由で、辞退の申し出があった。
- C. 援助金額：昭和58年度の援助金50万円、上記辞退分25万円、および60年度分のうち25万円（前期分）を予定していたが、成茂科学器械から学会を通して平本氏（東工大）に別枠として50万円の寄付があり、そのうち25万円について平本氏から辞退の旨表明があったので、これを加えて総計125万円を今回の援助金の対象額とした。（別表参照）
- C. 選考結果 今回はサーキュラー48号3頁に記した様にISDB国際会議（Los Angeles）の出席者を対象として4月27日に選考が行われた。

選考の基準は、研究内容の評価の他に 1) 発表者である。2) 学会に active に参加してきた人。3) 年齢、地域、学問分野が片寄らないよう分散させた。4) 比較的日本に近いことから25万円を20万円づつとして1人でも多くの人にもわたるようにした等である。

選考の結果は下記の通りであり、第33回運営委員会に報告した。

（採択者の氏名はアイウエオ順、括弧内は支給金額、ISDB会議申込書写し以外の添付書類）
阿形清和（基生研助手）〔20〕：推薦状（江口吾朗教授、岡田節人教授）、業績リスト

浅島 誠(横浜市大教授) [20]: 1st Intern. Symp. Cell Endocrinology 招待状

雨宮昭南(東大・臨海・助手) [20]: Woods Hole ウニ胚発生学シンポジウム参加, 業績リスト

佐野 清(北里大・助教授) [20]: S. S. Koide 博士(ニューヨーク, ポピュレーション・カウ
ンセル生物医学研究センター・アソシエートディレクターより招待状

松井太衛(名大・研究生) [20]: 推薦状(星元紀教授), 研究概要および業績リスト

吉永一也(熊大・助手) [20]: 推薦状(藤本十四秋教授)

(別枠) 平本幸男(東工大教授) [25]

援助金合計額 145万円

端数の5万円は予備費とした。この結果成茂寄付金の現在までの収支は次の表のようになる。

(利子は省略)

別表		S 60. 5. 9	
		収入(万円)	支出(万円)
1回	昭和58年	50	0
2回	昭和59年	50	25
3回	昭和60年	100	145
累 計		200	170

10. 学会による ISDB 招待講演者への旅費一部援助

日本発生物学会会員で ISDB Los 会議で招待講演者として, またワークショップオーガナイザーとして活躍なさる竹市雅俊氏(京大・理・生物物理)と岡田益吉氏(筑波大・生物)の二氏に旅費の一部としてそれぞれ10万円ずつを学会より贈った。(第33回運営委員会決定第18回総会承認)。

11. 第3回成茂海外出張旅費援助の募集

第3回後期分として1名(25万円)を募集します。

応 募 締 切 昭和60年12月15日

申請用紙送付先 早稲田大学教育学部 生物学教室内, 日本発生物学会事務局

〒160 新宿区西早稲田 1-6-1

申請用紙は上記新事務局に御請求下さい。申請用紙の他, 推薦状, 相手方の招待状などを添えても構いません。(サーキュラーNo.48, No.50参照)

12. 昭和61年度ナポリ臨海実験所派遣研究者募集要項

日本学術振興会

1. 趣 旨

日本学術振興会は, 国際学術交流事業の一環として, 昭和40年度以来イタリアのナポリ臨海実験所(Stazione Zoologica di Napoli-1874年に設立された国際的な海洋生物学の研究機関)に研

究者を派遣している。なお、この事業は昭和59年度から、制度的に本会とイタリア学術研究会議 (National Research Council of Italy-CNR) との間で実施している研究者交流事業の下に組込んで実施している。

2. 募集資格

派遣の対象となる者は、我が国の大学等学術研究機関において常勤の研究の職に就いている研究者であること。

3. 対象分野

海洋生物学の分野

4. 募集人員・派遣期間

◇教授・助教授級 1人 2週間～1か月

◇助手級 1人 4～6か月

5. 経費負担区分

◇本会負担：渡航費—可能な範囲の低廉航空賃

◇CNR負担：滞在費—短期 100,000リラ／日

長期 1,200,000リラ／月

国内旅費—実費支給

6. 申請手続

希望者は、その所属する大学等学術研究機関の長の承諾を得て、次の書類を提出すること。

1) ナポリ臨海実験所派遣研究者申請書(様式1)

正本1部 写し4部(使用用紙A4に限る)

2) 派遣研究者申請者調書(様式2)

正本1部 写し4部(使用用紙A4に限る)

7. 申請受付期間

昭和60年10月1日(火)～昭和60年10月31日(木) 必着

8. 選考ならびに結果の通知

昭和60年11月中旬にナポリ臨海実験派遣研究者選考会を開催し、派遣研究者の選考を行う。選考の結果については、12月上旬ごろに通知する。

なお、派遣に際しては、事前にイタリア学術研究会議の承諾が得られることが必要であるので、正式の採用通知はその結果を待って行う。

9. その他

募集に関する問合せまたは申請書式の入手を希望する場合は下記に連絡すること。

〒102 東京都千代田区麹町5-3-1(ヤマトビル)

日本学術振興会研究協力課

ナポリ臨海実験所派遣研究者係

電話(03)263-1721(代表)

昭和61年度山田科学振興財団への研究援助候補推薦について

山田財団から研究援助候補推薦要領が届きました。応募なさる方は学会事務局へ推薦書用紙を申し込んで下さい。

- 1) 推薦書用紙送付：60年9月
- 2) 申請期限：61年1月末日（発生物学会事務局あて郵送）
- 3) 学会内審査：2月
- 4) 財団へ推薦：3月上旬

推薦要領は次の通りです。

13. 昭和61年度山田科学振興財団研究援助候補推薦要領

援 助 の 趣 旨

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事する個人又はグループに対し援助します。

援助の金額及び期間

イ. 金 額

(A) 1千万円前後2千万円以内の援助
(B) 3百万円前後5百万円以内の援助 併せて10数件

ロ. 期間 1年を原則とします。研究の継続を必要とする場合は、毎年提出された推薦書に基づき選考します。

推薦方法

イ. 推薦者 本財団が依頼した学(協)会の代表者

ロ. 推薦件数 1推薦者ごとに(A), (B)のおのおの1～2件

ハ. 推薦手続 推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。

1. 所定の推薦用紙又はその写しに必要事項を記入したもの 5部

2. 添付書類 (ページ・研-5 参照)

記載上の注意

イ. 黒インクで明瞭に記入して下さい。

ロ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。

ハ. 推薦書第1頁欄外の脚注には記入しないで下さい。

ニ. 代表研究者は所属する大学(部等)・研究機関等の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

推薦締切期日 本財団へ推薦書が到着する締切期日は昭和61年3月31日(月)です。

選考方法 選考委員会において選考のうえ、理事会が決定します。

選考結果の通知 昭和61年6月末迄に推薦者及び代表研究者等にあてて通知します。

援助金の贈呈 昭和61年6月及び12月に2分割して支給します。

推薦書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)

〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号
ロート製薬株式会社内

電話 大阪 (06) 758-1231 ロート製薬株式会社呼出

研究の成果又は会計の報告

援助金の受領者に対して、必要に応じ、研究経過、研究成果又は会計について報告書の提出又は発表を求めます。

付

イ. 援助金の使途を変更する場合には、予め本財団の承諾を得て下さい。

ロ. 援助金から支出することのできない経費は、文部省科学研究費の場合に準じます。

ハ. 研究成果を文書によって発表される際には、本財団(財団法人 山田科学振興財団, Yamada Science

Foundation)の援助による旨を記載し、報文の類いにあつてはその別刷2部、また著書の類いにあつてはその1

部をご寄贈願います。

ニ、ご提出いただきました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

14. 山田科学振興財団の来日派遣集会の援助について……………

昭和61年度の援助について下記のように募集を行う旨通知をいただきました。

申し込み用紙の請求、その他細部については直接、財団にご連絡下さい。

援 助 名	募 集 開 始	締 切 日
来 日 (61年4月～62年3月分)	60年4月1日	60年11月30日
長 期 間 派 遣 (61年4月～62年3月分)	60年4月1日	60年11月30日
短 期 間 派 遣	出発月の4ヵ月前の15日が締切日 (例：60年10月出発の場合60年6月15日が締切日)	
学 術 交 流 集 会 (61年4月～62年3月分)	60年4月1日	60年9月30日

申込書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団

(Yamada Science Foundation)

〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号

ロート製薬株式会社内

電 話 大 阪 (06) 758 局 1231

ロート製薬株式会社 呼出

15. 国際生物学賞について

下記の趣旨で新たに国際生物学賞が設けられ、本学会にも会長あてに推薦依頼が届きましたのでお知らせ致します。

国際生物学賞概要

1. 趣 旨 天皇陛下在位60年と陛下の長年にわたる生物学の御研究をお慶び申し上げ、これを記念するとともに生物学の奨励を図るため、国際生物学賞を設ける。

2. 名 称 和文名 国際生物学賞

英文名 International Prize for Biology

3. 授 賞 者 国際生物学賞委員会

委員長 有澤廣巳(日本学士院長)

構 成 40名以内の委員で構成し、本委員会の下に運営委員会、審査委員会及び募金委員会を置く。

所在地 東京都千代田区麹町5-3-1 ヤマトビル

日本学術振興会内

設 立 昭和60年4月25日

4. 受 賞 者 生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。原則として毎年1人とする。
5. 受賞分野 受賞分野は、各年度毎に決定する。昭和60年度は「系統・分類学を中心とする生物学」とする。
6. 選 考 国際生物学賞委員会が毎年決定する分野における研究者について、内外の有識者からの推薦に基づき、国際生物学賞委員会の審査委員会が審査選考し、国際生物学賞委員会が決定する。
7. 顕 彰 受賞者には、国際生物学賞（賞状、賞牌、副賞1,000万円）を授与する。また、受賞者に対しては、賜品が下賜されるようお願い申し上げる。
8. 授 賞 式 授賞式は、受賞者夫妻を招いて、毎年秋東京で行う。
なお、授賞式にあわせて国際シンポジウムを開催する。
9. 基 金 本賞のため、日本学術振興会に寄付金等による特別基金を設ける。

16. 日本学術会議第97回総会報告

——第12期最後の総会会則改正および諸勧告・要望を採択——

日本学術会議広報委員会

第97回日本学術会議総会は、4月16日及び17日の両日にわたって開催された。この総会は第12期としては最後の総会であった。第1日午前9時30分、会長報告を始まり、各部、各常置委員会及び特別委員会の報告が行われた後、諸提案の審議に移り、2日間のうちに、法改正に伴う会則の改正及び関連する申合せ、並びに1勧告と3要望の諸案を可決し、さらに科学技術会議第11号答申について意見交換を行った。審議が順調に進捗したため、予定の会期を短縮して2日間で総会を終了することができた。

会 則 の 改 正

日本学術会議法の改正に対応して会則の改正案が長期間にわたって規則等策定委員会（特に内部組織分科会）で検討されてきたが、ようやく原案がまとまり、会長から総会に提案された。その主要な点は、(1)運営審議会の構成員を、会長、副会長、部長、副部長のほか、各部の幹事とする。(2)運営審議会が常置又は臨時の委員会の審議に関連する重要な事項を議題とするときは、関係委員会の委員長又は幹事の出席を求めなければならない。(3)運営審議会は任務の遂行上必要な委員会を、総会の議決を経て、附置することができる。(4)法第15条の2で定める常置の委員会は、「当分の間」別表で定める国際学術交流、学術体制、研究費問題、長期研究計画、科学者の地位及び学問・思想の自由の各委員会とする。(5)法第15条の2に基づき、総会は臨時の委員会を置くことができる。特に緊急の必要があれば、運営審議会が、総会の事後承認を条件として、これを置くことができる。というものである。審議の過程で、字句修正の意見は別として、最も問題と

なったのは、常置委員会の列举にかかわる規定であった。常置委員会の編成の見直しについては次期の会員による審議をまつこととし、新たな結論ができるまでは取りあえず現行の常置委員会を存続せしめるという趣旨で、「当分の間」という表現が選ばれたのである。投票による採決の結果、賛成 108、反対 20、白票 6 で原案どおり可決された。

これに関連して、第12期の会員の任期中、臨時委員会として、エネルギー・原子力、学術情報・資料、発展途上国学術協力問題、環境問題、国際協力事業及び規則等策定の各特別委員会を引き続き存続すること、取り分け国際協力事業特別委員会についてはその特殊性にかんがみ、活動に空白期間の生じることを避ける措置をとるよう第13期に期待する旨、申し送ることを申し合わせた。また運営審議会附置委員会として、日本学術振興会、広報、財務、勧告等、国際会議主催等検討、二国間学術交流及び研連検討の各委員会を引き続き存続することも申し合わせた。さらに、会長等の互選に関する内規の改正案が可決された。

大学レベルでの発展途上国との学術交流の改善について勧告

発展途上国学術協力問題特別委員会の提案に基づき、次の勧告が採択された。

「大学レベルでの発展途上国との学術交流を可能にし、また、促進するため、国として次のような新しい施策を講じることを勧告する。(1)発展途上国との大学間学術交流のための予算費目を国立大学に新たに設けること。(2)発展途上国との大学間学術交流促進のための施策を公・私立大学に対しても講じること。(3)『国際学術協力基金』(仮称)設立の可能性を検討すること。」

要望の採択

第7部の提案にかかる「我が国の脳疾患に関する教育・研究・診療対策の中心的課題として、臨床神経生理学講座あるいは部門の新設及び医療体制の確立について、早急に適切な措置を採る」ための要望案、科学者の地位委員会の提案にかかる「研究公務員の特殊性にかんがみ、政府が研究公務員特例法というべき特別な法的措置を講じること、その際、機関の設置目的に沿う限り、研究の自由と成果の公表の自由を保障すること、任用、勤務評定、兼職、勤務時間と場所、研修などについて柔軟な運用を保障すること、機関の運営に研究公務員の自主性と自発性が反映されるよう、これらの者の代表によって構成される組織を機関内に設けること、などに留意すること」の要望案、並びに同じく科学者の地位委員会の提案にかかる「婦人研究者の地位の改善に資するため、大学・研究機関における採用・昇進等の状況と問題点、長期的見通しについて調査し、その結果を公開する機能をもつ総合的調査機関を政府に設置する」ための要望案がそれぞれ可決採択された。

会長の所感と謝辞

総会を終えるに当たって、塚田会長は、推薦制を基礎とする新しい学術会議の出発のための諸規則の制定を完了したことについて、会員及び事務局の協力に感謝し、併せて多年にわたる有権者各位の支援に謝意を表するとともに、次期以降も本会議が設立当初の精神を踏襲して活動を展開することを期待する趣旨の所感と謝辞を述べた。午後5時、総会は幕を閉じ、会員はそれぞれの思いを胸に、暮れなずむ学術会議をあとに三々五々散って行った。

大学レベルでの省展途上国との学術交流の改善について勧告

大学レベルでの発展途上国との学術交流を可能にし、また、促進するため、国として次のような新しい施策を講ずることを勧告する。

- (1) 発展途上国との大学間学術交流のための予算費目を国立大学に新たに設けること。
- (2) 発展途上国との大学間学術交流促進のための施策を公・私立大学に対しても講ずること。
- (3) 「国際学術協力基金」(仮称)設立の可能性を検討すること。

脳疾患に関する教育・研究・診療対策としての臨床神経生理学講座の設置について(要望)

我が国の脳疾患に関する教育・研究・診療対策の中心的課題として、臨床神経生理学講座あるいは部門の新設及びそれに伴う医療体制の確立について、早急に適切な措置を採られることを要望する。

なお、上記の講座あるいは部門の具体的な名称などは、各大学の実情を踏まえて決定されることが望ましい。

また、国立大学のみでなく、公私立大学に対しても、この要望の実現に適切な支援、助成が行われることが望ましい。

婦人研究者の地位の改善に資するための総合的調査機関の設置について(要望)

婦人研究者の地位の改善に資するため、大学・研究機関における採用・昇進等の状況と問題点並びに長期的展望に立った今後の見通しについて調査し、その結果を公開する機能をもつ総合的調査機関を政府に設置されるよう要望する。

研究公務員特例法の制定について(要望)

国立の研究機関及びこれに準ずる組織(以下「研究機関等」という。)に勤務する公務員教育公務員及びこれに準ずるものを除く。)で研究又は研究の統轄に主として携わる者及び研究の要素が含まれる職務に従事する者(以下「研究公務員」という。)の特殊性にかんがみ、研究公務員特例法(仮称)のような特別な法的措置を講じられるとともに、法制定に当たっては、下記の点に留意されることを要望する。

- (1) 研究機関等の設置目的に沿う限り、研究公務員の研究の自由、研究成果の公表の自由を保障すること。
- (2) 研究公務員の職務の特質にかんがみ、任用、勤務評家、兼任ないし兼職、勤務時間及び勤務場所、研修等については、国家公務員法規定の一律的適用を避け、研究機関等の設置目的に応じた柔軟な運用を保障すること。
- (3) 研究公務員の代表によって構成され、研究公務員の自主性、自発性が研究機関等の運営に反映されるような何らかの組織を各研究機関等の内部に設置すること。
- (4) 地方公共団体又は特殊法人の設置する研究機関に勤務する研究者についても研究公務員特例法(仮称)を準用し得るみちを開くこと。

17. 会 員 移 動 (昭和60年2月～5日)

<新入会>

京 泉 誠 之

所 属

放射線影響研
(自)〒734 広島市南区皆実町
6-11-9 402号

三 宅 敏 彦

京都府立医大・二病理

武 居 幸 子

名大・理・性

秋 元 義 弘

東大・理・動

中 山 広 樹

阪大・医・癌研代調

黒 田 秀 也

阪大・医・病理病態
(自)〒560 豊中市上野西4-2-29

丸 尾 文 昭

筑波大・生

黒 岩 厚

都神経研

松 井 浩 二

広島大・医・一解

佐 野 護

愛知県心身障害者コロニー
発達障害研

庄 司 明 子

国立武蔵療養所
神経センター 機能研

浜 島 光 世

藤田学園保健衛生大・医・脳
神経外科

竹 内 隆

基生研

水 野 美賀子

東京慈恵会医大附属病院

(①テーマ ②材料)

①細胞分化, 癌化に伴う細胞表層及びクロ
マチン構造の変化(モノクローナル抗体
による解析)

②培養細胞株・腫瘍組織(ヒト)

①神経発生グリア細胞

②ラット・マウス・チック等

①カイコ卵の初期発生

②カイコ Bombyx mori

①ウニ胚発生に及ぼす紫外線の影響

②ウニ

①細胞分化と細胞間相互作用

②マウス

①集合キメラを用いた sl/sl⁺ マウス不妊機
構の解析

②マウス

①ショウジョウバエの初期発生に必要な母
性因子について

②Drosophila melanogaster

①発生・分化の分子生物学

②ショウジョウバエ・マウス・ニワトリ

①Developmental neurobiology

②mouse embryo

①カルモデュリン・アデニル酸シクラーゼ
など

②培養細胞・哺乳類神経組織

①筋肉における遺伝子発現

②ニワトリ

①glioma 細胞の分化

②rat, human glioma cell

①がんの転移機構の細胞生物学的研究

②マウスメラノーマ B16細胞

①造血発生にともなうヘモグロビン分子種
変換の機構に関する研究

高松哲郎 京都府立医大・二病理

餅井 眞 基生研・形態形成

小野さとみ 名大・理・化

北村幸彦 阪大・医・腫瘍代謝

米村重信 東大・臨海

西方 敬人 京大・理・動

山崎 尚 山口大・理・生

木全弘治 名大・理・化

大月 恒 大分大・教育・生

代谷 陽子 和洋女子大・生

芳賀和夫 筑波大・生

伊藤嘉明 京大ウイルス研

②ゴールデンハムスター

①心臓を中心とした形態発生

②ニワトリ

①分化転換

②ニワトリ

①軟骨分化

②Chick limb bud mesenchymal cell

①肥満細胞の分化・卵巣の形態形成

②マウス

①細胞質分裂の機構

②ウニ

①発生と分化における細胞質の役割

②ホヤ

①両生類卵の多精防止反応

②イモリ *Cynops pyrrhogaster*

①軟骨分化における細胞間マトリックスの役割

②ニワトリ・マウス

①細胞の分裂増殖

培養細胞の海産無脊椎動物の初期胚

①生体反応

②アワビ・Halotis

①卵内共生体

②アザミウマ（昆虫）

①マウス発生初期細胞で増殖するポリオーマウイルスエンハンサー変異株の研究

②マウス胚ポリオーマウイルス

<住所変更>

新

旧

天 沼 昭	朝日大学・教養・生	岐阜歯大・生
小 林 啓 邦	同 上	同 上
菱 田 富 雄	同 上	同 上
山 田 可 水	同 上	同 上
只 野 正 志	〒502 岐阜市三田洞東2-3-9	岐阜大・教養・生
星 元 紀	東京工大・理・生	名大・理・生
和 田 圭 司	〒577 東大阪市小阪本町2-5-19	〒589 大阪府南河内郡狹山町大字半田645 金剛ハイツ C2
山 本 謙 也	岐阜大・教養・生	京大・理・動
金 谷 一 司	日本抗体研 (自) 〒370 高崎市藤塚町 80-1 松谷コーポ 201号	愛媛大・理・生
押 尾 茂	〒274 船橋市飯山満町3-1727-7	〒273 船橋市西般2-83
鈴 木 範 男	金沢大・理・臨海	帝京大・医・生化
二 木 馨	北里大・医・形成外科	早稲田大・教育・生
玉 手 英 利	Dept. of Developmental Genetis, and Anatomy School of Medicine Case western Reserve Univ Clea- veland, OH 44106, USA	山形大・医・二生化

<退会会員>

江 上 信 雄, 二 宮 博 義, 広 部 知 久, 小 穴 孝 夫, 青 地 正 寿,
池 田 章, 石 谷 昭 子, 内 山 恒 夫, 岡 山 実, 川 原 造 通,
河 口 豊, 阪 田 隆, 佐 方 功 幸, 佐 藤 隆, 佐 藤 信 生,
清 水 泉 太, 鈴 木 康 宣, 柚 源 一 郎, 田 口 茂 敏, 田 中 邦 男,
西 田 秀 雄, 安 田 国 雄, 山 本 典 子, 井 上 泰 江, 星 野 道 雄,
鳥 田 雄 一, 南 川 玲 子, 高 橋 和 秀

〔賛助会員〕

組織培養はバイレックスコーニングの岩城硝子㈱ (〒100 千代田区丸の内 3-2-3)

TEL 03-214-7401

生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書㈱ (〒211 川崎市幸区小倉610-1-506)

TEL 044-533-0470

日製産業株式会社 (〒453 名古屋市中村区名駅 4-6-18 名古屋ビル内)

発生学をはじめとする生物科学書の出版社・培風館 (〒102 千代田区九段南 4-3-12)

最良の選択ファルコン組織培養器具ベクトン・ディッキンソン・オーバーシーズ Inc.

(〒107 港区赤坂 8-5-84 島藤ビル) TEL 03-403-9991

マウス・モノクローナル抗体(アロ抗体)は明治乳業㈱ (〒104 中央区京橋 2-3-6)

TEL 03-271-4333

三菱化成生命科学研究所

(〒194 町田市南大谷11)

科学の技術に奉仕する理工学社

(〒113 文京区本駒込 5-9-10)

TEL 03-928-5211

次代を担うバイオテクノロジー和研薬株式会社 (〒606 京都市左京区北白川西伊織町25)

TEL 075-721-8111

生物科学・団・国際交流派遣研究員の推薦依頼

生物科学・団・国際交流事業は今年で5年目を迎えました。すでに5名の方々がそれぞれ3ヵ月間の国際共同研究に成果をあげています。去る7月15日に行われた生物科学・団・国際交流計画関東地区実行委員会で、来年は日本から1名、アメリカから1名の若手研究者の交流を行なうことが決められました。つきましては、候補者を御推薦下さるようお願いいたします。

必要書類

1. 推薦者

1. 本人候補者の略歴とリスト

1. 候補者の希望留学先と研究計画(1,500字以内)

1. 締切:昭和60年9月30日

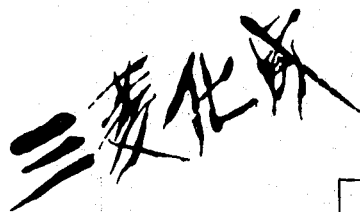
1. 問合せ及び書類送付先: 〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部生物化学教室内

生物科学・団・国際交流基金設立準備会

代表者 酒 井 彦 一

(03) 812-2111 内線 4396



なか しべ っ

中標津血清

ライフインダストリーの三菱化成が採血から濾過まで一貫国内生産
最終濾過は孔径 $0.1\mu\text{m}$ のメンブレンフィルター使用

準胎児血清

生後24時間以内で初乳を飲む前の新生仔牛から採血

新生仔牛血清

生後2週間以内の新生仔牛から採血

成牛血清

1.5才以上の牛から採血

ARMOUR血清

Armour Pharmaceutical Company (U.S.A.) 製造

胎児血清

(Rehatuin® F.S.)

仔牛血清

生後16週間以内の仔牛から採血

何れもロットチェック用サンプルを提供致します。



三菱化成工業株式会社 医薬事業部

〒100 東京都千代田区丸の内2-5-2(三菱ビル)

☎03(283)6791(直通)

大阪支店化成品部門

☎06(208)4560(直通)

東京支店化成品部門

☎03(283)6100(直通)

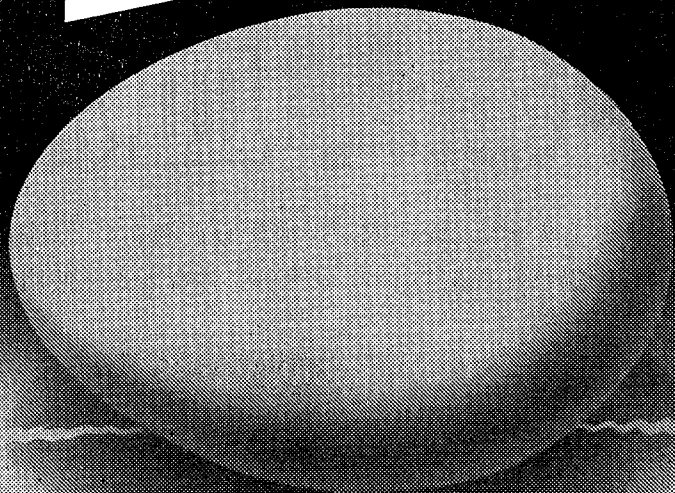
名古屋支店化成品部門

☎052(562)2556(直通)

九州支店化成品部門

☎092(291)8891

増殖 エネルギー



増殖を支える大きな力、組織培養用培地 —— 日水製薬から

■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 グルタミン・重曹不含	イーグルMEM培地①
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 PR・グルタミン・重曹不含	イーグルMEM培地②
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 KM・PR・グルタミン・重曹不含	イーグルMEM培地③
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 浮遊培養用・グルタミン・重曹不含	イーグルMEM培地④
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 アミノ酸4種・グルタミン・重曹不含	イーグルMEM培地⑤
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 グルタミン・重曹不含	イーグルBME培地
イーグルMEMアミノ酸ビタミン培地	
■抗生物質・重曹不含	ダルベッコ変法イーグル培地①
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 グルタミン・重曹不含	ダルベッコ変法イーグル培地②
■重曹不含	199培地
■製法特許・重曹不含	ハムF12培地①
■重曹不含	RPMI1640培地①
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 グルタミン・重曹不含	RPMI1640培地②

■重曹不含	フィッシャーの培地
■製法特許・高圧蒸気滅菌可能 グルタミン・重曹不含	ES培地
■重曹不含	ハンクス液①
■PR・重曹不含	ハンクス液②
■重曹不含	アール液
■ダルベッコ	PBS(-)粉末
■ダルベッコPBS用	金属塩類溶液
■無菌凍結乾燥	グルタミン



製造発売元

日水製薬株式会社

本社 〒170 東京都豊島区巣鴨2-11-1

電話 03 (918) 8166 (代)

営業所 東京・関東・大阪・名古屋・広島・福岡・仙台・札幌

BIOCHEMICAL AND ORGANIC COMPOUNDS

SIGMA PRICE LIST APRIL 1977

for Research and DIAGNOSTIC CLINICAL REAGENTS

LET'S ASK YOU TO ORDER YOUR SIGMA

Telephone COLLECT (Charges Reversed) from Anywhere in the World

TO PLACE AN ORDER Call your supplier that you want to place a collect call. "Is Sigma?"

Since this is your Order department, you will reduce our costs a little for each call. (We're "Order Department" for any certain individuals. However, it's a good idea to get the name of the person you call to to create a problem delivery later.)

TO CALL OUR CUSTOMER SERVICE DEPT. 314-771-5765

To discuss a Shipping or Technical problem, or for any reason, please call.

If you have any trouble getting really direct service, call the direct number. (This should be (This Article) searching for a Person-to-Person direct.)

314-771-5750

SIGMA

シグマ製品がブーンと お求めやすくなりました！

日本特殊薬品では、アメリカ・シグマ社と代理店
契約を結び、シグマ社最新カタログの全製品を、
下記の要領で簡単にお求めいただけます。

●シグマ社の製品一切は、ご使用者への直結販売にかぎります。●遠隔地への送
品には、荷造り・送料を実費申し受けます。少量の場合には、代金引換えにてお
願いすることがあります。●汎用品はできるだけ常備していますが、品切れ、その
他の場合は約1カ月のうちに取りよめます。(船便のときは約2カ月後)

お問い合わせは下記へ

〈シグマ社受権代理店〉

日本特殊薬品株式会社

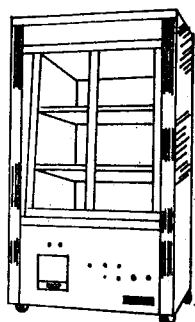
大阪市西区京町堀1丁目8番22号(〒550) ☎06(448)2261(代表)
私書箱番号(〒530-91) 大阪中央局第755号

910-261-0593

SIGMA
CHEMICAL COMPANY

NK式生物研究用機器

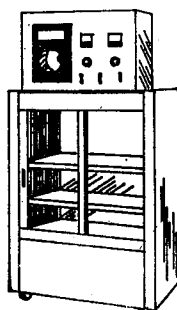
NK式電気低温恒温器(送風循環型) 高精度普及型



型式	LP-100 -S型	LP-150 -S型	LP-200 -S型
仕様			
内法 間口×奥行 ×高さ%	460×380 ×490	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	26万円	30.5万円	32万円

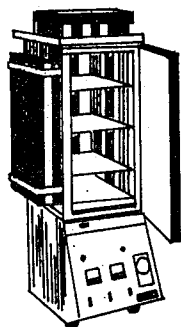
※その他いろいろなタイプがあります。

NK式プログラム電気低温恒温器(送風循環型) 四季の温度がプログラムで自在に再現できます！



型式	LP-150 -3P	LP-200 -3P	LP-300 -3P
仕様			
内法 間口×奥行 ×高さ%	460×880 ×480	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	49.8万円	53.5万円	60万円

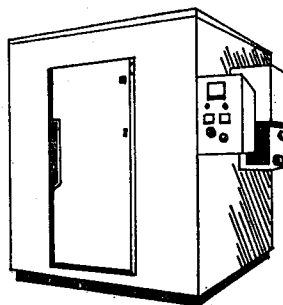
NK式人工気象器 植物の育成、小動物(昆虫)飼育の本格派！



型式	LH-100 -RD型	LPH-100 -RD型	LH-100 -RDP型
仕様			
内法 間口×奥行 ×高さ%	360×350 ×680	360×350 ×680	360×350 ×680
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+10℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	温度のみ 47万円	温・湿 度付 73万円	プログラ ム付 66万円

※その他いろいろなタイプがあります。

NK式プレハブ電気低温恒温槽 組立、移設、増設が思いのまま！

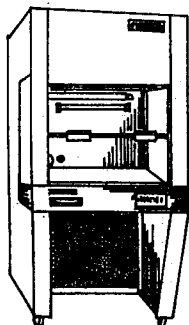


精密型

- LH型+5℃~45℃
価格1坪1,190,000円
より各種
- LP型+18℃~45℃
価格1坪1,290,000円
より各種

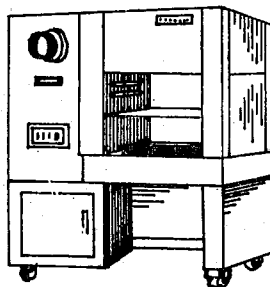
※詳細はプレハブシリーズカタログをご請求下さい。

NK式クリーンベンチ(垂直層流型)



NKB-VS-850
¥780,000
NKB-VS-1300
¥880,000

NK式クリーンベンチ(垂直層流両面型) 無菌作業の能率アップに！



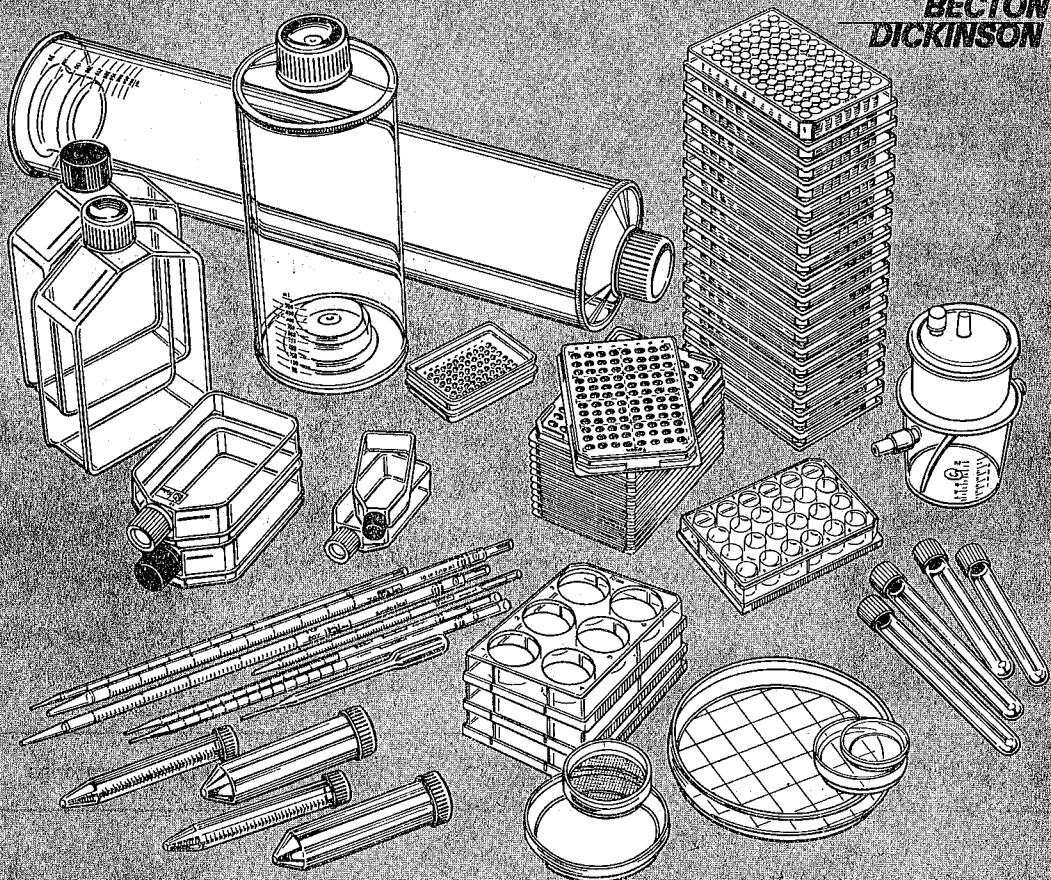
NKB-VW-850
¥1,200,000
NKB-VW-1300
¥1,500,000

NKS 株式会社 日本医化器械製作所

本社 〒550 大阪市西区江戸堀1丁目19番24号
東京営業所 〒183 東京都府中市緑町7053-4
工場 〒583 羽曳野市駒ヶ谷5番地47号

電話 大阪 06(443)0712(代)
電話 府中 0423(65)3245(代)
電話 羽曳野 0729(58)1919(代)

**BECTON
DICKINSON**



1957年、組織培養器具にプラスチックの時代が始まった。 **ファルコン組織培養器具**

1956年11月、米国 Emeryville の海軍微生物研究所では、人や動物の細胞をポリスチレン製ディッシュで培養することに興味を示しました。このことにいち早く着目したファルコンでは、プラスチック表面における細胞の付着や増殖について研究を進め、1957年ついに組織培養処理を施した高品質のプラスチック製ディッシュの開発に成功致しました。

それは、ガラス製器具の使用にとも

なうさまざまな問題点を一挙に解決し、組織培養の分野に大きな前進をもたらしました。

そして今日まで、ファルコンの活動は、よりすぐれた組織培養器具を開発することに集中しました。

その成果として、最近ではより高度な表面処理を施したプライマリア組織培養器具をお届けすることもできました。

組織培養の進歩とともに、ファルコンは常に新しい可能性をもとめ続けます。



Falcon

輸入販売元

Becton Dickinson Overseas Inc.

ベクトン・ディッキンソン オーバーシーズ インク

〒107 東京都港区赤坂 8-5-34 島藤ビル TEL 03(403)9991(代)

●B-D、ファルコン、Falcon、プライマリアはベクトン・ディッキンソン アンド カンパニーの商標です。●Becton Dickinson Labwareはベクトン・ディッキンソン アンド カンパニーの事業部です。

製造元



Becton Dickinson Labware

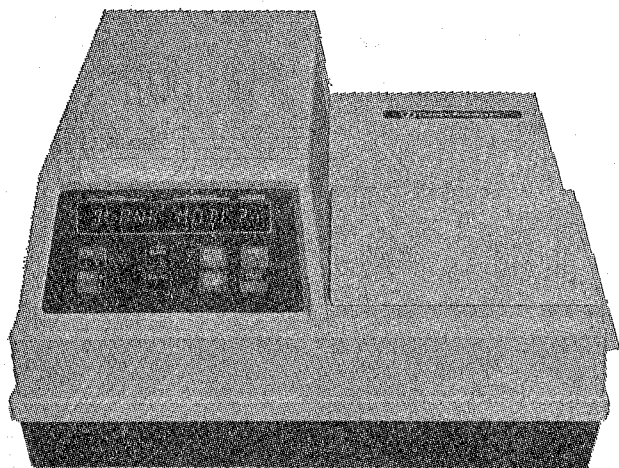
ベクトン・ディッキンソン ラブウェア事業部

Division of Becton Dickinson and Company

蛍光法による高感度測定が可能です

マイクロプレート用蛍光度計

タイターテック フルオロスキャン



★96穴用マイクロプレートで蛍光免疫測定ができます。

★1pmol (10^{-12}) 4-メチルウンベリフェロンまで測定できます。

★相対値表示と絶対値表示のモードが選べます。

★コンピュータコントロールができます。



大日本製薬株式会社
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94 提携
TEL 大阪 (06) 386-2164 (代表)

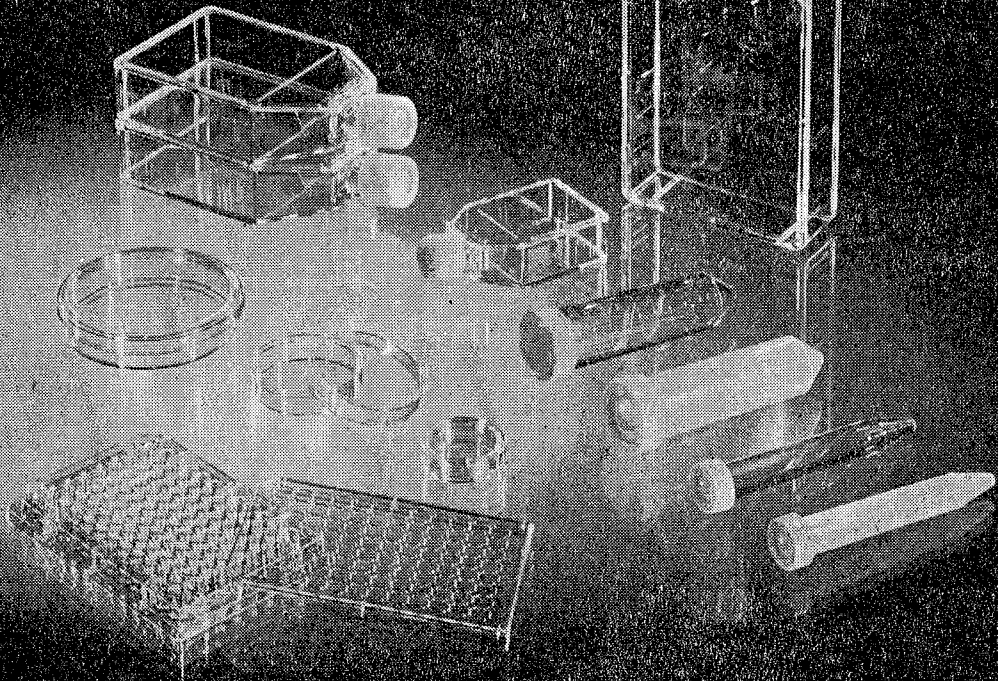


Flow Laboratories

CORNING

組織培養用プラスチック製品

ご満足いただけないCORNING組織培養用プラスチック製品は、無償でお取替えすることをお約束します。



**PYREX®のコーニングが提供する組織培養用プラスチック製品は
実験のバラツキを解消します。**

●無菌生産

コーニングの組織培養用製品は、無菌環境で作られています。このため、バクテリアは勿論、機械油の蒸気やほこり等の付着もなく、培養特性が安定しています。

●フォームラック

コーニングの遠沈管・培養管には、フォームラック付きがあります。収納や運搬に便利なうえ、ガタツキがないため傷をつけることがなく、沈澱物が再浮遊する心配もありません。

●100%リークテスト

コーニングのフラスコは、全数圧力試験を行っております。また厚手に成形されているので、リークやクラックの心配はありません。

●ダブルシールキャップ

ダブルシールキャップは、容器の口部内側と端部の2箇所までシールするもので、漏洩を完全に防ぎます。

●クロスコンタミネーション防止

マイクロプレートは、孔が独立しており、クロスコンタミネーションの危険がありません。

CODE	品名	品種	個/パック	個/ケース	材質(本体)	表面処理	滅菌	備考
25000	ペトリ皿	35φ×10mm	20	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	
25010		60φ×15mm	20	500	"	○	"	
25020		100φ×20mm	20	500	"	○	"	
25100	フラスコ	25cm ³ (70mℓ)	20	300	スチロール樹脂	○	無菌生産	カントネック、ダブルシールキャップ
25110		75cm ³ (270mℓ)	5	100	"	○	"	"
25120		150cm ³ (600mℓ)	5	40	"	○	"	"
25140	ローラー ボトル	850cm ³ (2350mℓ)	2	36	スチロール樹脂	○	γ線	ダブルシールキャップ
25200	培養管	16φ×125ラック付	50	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	ダブルシールキャップ
25310	遠沈管	15mℓラック付き	50	500	スチロール樹脂	—	γ線	許容遠心力1800 G、ダブルシールキャップ
25330		50mℓラック付き	25	300	ポリプロピレン	—	ETO	" 5000 G "
25820	マイクロ プレート	24孔、平底、蓋付き	1	50	スチロール樹脂	○	γ線	
25860		96孔、平底、蓋付き	1	50	"	○	"	

●表面処理は、親水性と細胞親和性を与えるもので、コーティングではありません。
●ETOは、エチレンオキシド・ガス滅菌です。
●詳細はカタログをご請求ください。

岩城硝子株式会社

本社/〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 (富士ビル)

本社販売部 ☎ 03(214)7401(代)
大阪支店 ☎ 06(362)6291(代)
名古屋支店 ☎ 052(211)3855(代)

九州支店 ☎ 092(451)5606(代)
広島支店 ☎ 082(248)0293(代)
札幌営業所 ☎ 011(221)3477(代)